

NPO法人

全日本語りネットワーク

〒376-0045 群馬県桐生市末広町 11-1

JR 桐生駅構内 桐生市民活動推進センター

(Fax) 0277-47-4066 (振替) 00130 - 2 - 114808

(E-mail) welcome@japankatarinet.jp

(HP) <http://japankatarinet.jp/>

2014. 11. 23 発行

ニュース

「第12回全日本語りの祭り in 南三陸」、テーマは「復興」

全日本語りネットワーク理事長 井上幸弘

「第12回全日本語りの祭り in 南三陸」は、304名の参加者のもと無事に終了しました。今回の祭りは受付開始からほぼ1週間で予定した300名の定員に達しました。それは東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県南三陸町を一度は訪れてみたい、という参加者皆さまの思いの表れでありました。そして、この大会で見たり聞いたりしたことは参加者の思いに十分に答えるものになったのではないかと。それは閉会式での皆さまの満足した笑顔や、数多くよせられたアンケートから窺うことができました。

復旧・復興は遅いが風化は速い。語り部バスに乗っていただき震災の現場を見ていただきました。何度もテレビで放映された町の防災対策庁舎。南三陸町の人々にとっては悲しみのシンボル。しかし、それは千年に一度といわれた東日本大震災を象徴するものの一つでもあり、存続についてはさまざまな意見があるようですが、広島原爆ドームのように、是非とも残していただきたいと思えます。

分科会・夜語りでは、しづがわ民話の会の皆さんに地元の民話と被災体験を語っていただきました。「命てんでんこ」、自分の命を守るのは自分、ものは再発行できるが命の再発行はできない、民話を語ることで元気になれた、等々。震災から3年半が経過して、ようやく語りができるようになった皆さん。そして語りたことがいっぱいある皆さん。私たちはただただ耳を傾けて聞きたい。

全体会では、4人のお話と郷土芸能の披露がありました。ホテルも被害を受けながら、被災者受け入れの先頭にたったホテル観洋の女将阿部憲子さんのお話。3年半にも及ぶ仮設住宅生活、そしてこれからまだまだ続く平成の森の畠山扶美夫自治会長さんのお話。すでに1万人もの中高校生、大学生、外国の人に被災体験を語ってきた、「まずもって」の志津川高校2年生の佐藤美南さんのお話。震災を風化させず、復興に向けて進んでいこうとする思いがひしひしと伝わってきました。特に一度志津川を離れながらも、震災をとおして南三陸をより好きになった美南さんのお話には、涙がでて止まりませんでした。全体会を閉めたのは地元の行山流水戸辺鹿子躍（ぎょうざんりゅうみとべししおどり）の披露。震災で鹿子躍の仲間を失い、道具も全て流されたが、奇跡的に泥の中から見つかった太鼓、衣装。そして躍りたいという中学生の思いが、行山流水戸辺鹿子躍を復活させたという村岡賢一さんのお話。力強い鹿子躍は、今回の「復興」という祭りのテーマにふさわしいものになりました。今回南三陸町で見たり聞いたりしたことを、今度は皆さん自身の言葉で家族の方に、周りの語りをする仲間たちに語っていただき、東日本大震災を記憶にとどめていただきたいと思えます。

分科会ではテーマに沿った語り手を決め、十分に語っていただきました。また2日間あった夜語りでも、積極的に皆さまから語ってもらいました。今回の祭りでは、全員が同じホテルに2泊したおかげで、分科会や夜語りのほかに各部屋でもお互いが語りっこをし、ミニライブ風交流があらこちらで遅くまで行われました。

南三陸ホテル観洋で語りの祭りを開催して本当に良かった。たくさんの感動に感謝します。次回は島根県での開催が決定しました。今回の反省を踏まえながら、皆さまの思い出に残る祭りとするためにも準備を行っていきます。